能登半島地震と辰年

副会長　橘　　亨

平成 6 年 1 月 1 日 16 時 10 分ごろ、最大震度 7、マグニチュード 7.6　の地震が能登半島を襲った。この地震による津波が発生し多くの家屋の浸水、また同時に火災が起こり多くの被害をもたらした。

元旦早々の地震によるこのニュースは日本全国の国民を驚かせた。2 月 23 日までに確認された死者は珠洲市 103 人、輪島市 102 人、石川県全体で計 241 人。依然連絡の取れない安否不明者も 9 人いる。死者の多くは倒壊した家屋の下敷きになるなど、地震が直接の原因となったとみられるが、長引く避難のストレスなどが要因となる災害関連死も珠洲市と能登町で 6 人ずつ、輪島市で 3 人の計 15 人にのぼる。

この地震で被害を受けた住宅は能登半島全体で 75000 棟、避難所への避難者は 12500 人余り、道路は寸断され、物資の輸送は止まり、ライフラインの被害により、停電、断水もいまだに続いている所が多い。

被害を受けた病院では、職員も被災し、自宅に戻れない、子供を預ける施設が利用できない等を理由に退職する看護師や、事務員が多数おり職員が病院に寝泊まりしたり、避難所から出勤する人もいて医療体制を維持するのが厳しい状況が続いている。そのため他県から応援看護師が駆けつけているが、宿泊場所確保に頭を抱えている。

仮設住宅の着工が始まっているが、仮設住宅を建設する場所が無く、やむを得ず海岸近くになってしまう。建設数も少なく、入居は入居希望者の数には程遠い。

復旧工事が急がれるが、道路が寸断されているため、車の移動が困難、工事人員数を増やしたいが、これも現地に宿泊できる施設が無い、これらの理由で復旧作業は長期化している。同じくボランティアの協力も不可欠であるが、事前登録者 6 万人近くに対し、前述の理由により実際被災地で活動しているのは 2700 人余り、救援活動時間も数時間に限られ復旧への道のりは険しい。

話は変わって、今年は辰年・・・・十二支の中で、唯一、辰（龍）だけが架空の生き物。天に昇る「昇龍」は天に昇っていく龍の姿であり、この姿は強運、成功等、縁起のいい生き物とされている。

しかし反面、竜が天高く舞い上がると、竜巻となって大きく天地が荒れる。干支とは関係ないかもしれないが辰年は大きな事が起きる事が多い年と言われている。

今年は辰年・・・・、元旦から、能登半島地震、翌二日には羽田空港の滑走路にて旅客機衝突炎上･･･幸い旅客機の乗客は全員無事ではあったが、これも信じられない出来事、多くの人が驚かされた事故が発生した。

辰年には景気が良くなると言われており、2 月には経済界で日経平均株価が、バブル崩壊後 34 年振りの高値更新、また今年の 7 月には 20 年振りに新紙幣が発行される予定となっている。

実は過去の辰年には、古くは戊辰戦争（1868 年）、日露戦争（1904 年）、「血のメーデー事件」（1952 年）等、好ましくない事象があった。半面、東京オリンピック（1964 年）、東海道新幹線開業（1964 年）、1988 年には「青函トンネル」「瀬戸大橋」「東京ドーム」が同時に竣工、2000 円札発行（2000 年）、「東京スカイツリー」開業、「iPS 細胞」発見の山中伸弥教授がノーベル生理学・医学賞を受賞（2012 年）明るい出来事もあった。このように、辰年には大きな変化がある事が多いようです。

今年、この後大きな暗い事件が起きない事を祈りつつ、**能登半島地震で被災された方々の一日も早い復興・復活をお祈りいたします。**